

## 文献案内

元興寺文化財研究所編『四天王寺亀井堂石造物調査報告書』（四天王寺、二〇一九年四月）

亀井堂は、四天王寺境内北東の湧水に、亀を象った石造水槽を備え、現在も先祖供養の経木流しが営まれる宗教施設である。生きた信仰空間とあって、誰もが目にすることはできても、文化財としての詳細は把握されていなかったが、石槽の実測を中心に多角的な検討が報告書にまとめられた。

亀形水槽は、甲羅を持つ上水槽と、そこから流れ出る水を受ける下水槽（甲羅部分が彫り窪められる）からなる。二〇〇〇年に明日香村の酒船石遺跡で亀形水槽が発見され、亀井堂の水槽にも関心が寄せられてきたが、この調査で、両者が湧水＋濾過水槽＋亀形水槽という同構造の導水施設と判明した。

上水槽の水槽本体と甲羅・頭部は別材で、ある段階で甲羅・頭部を加えたものであり、水槽本体にも手が加えられていた。復元される上水槽はシンプルな形状で、絵画資料（妙安寺本「聖徳太子絵伝」に岩座上の亀と柄杓の添えられた水盤が描かれる）を目安に、鎌倉末期が変更時期の下限とされる。

下水槽は、竜山石（播磨産凝灰岩）製の可能性が極めて高い。古墳時代に王権と密接な関わりで採掘が始まり、七世紀の畿内中枢部で利用が確認される石材である。加工技術や造形様式面での比較は報告書内に少ないが、六世紀末から七世紀初頭の四天王寺創建期、もしくは七世紀半ばの孝徳朝・斉明朝が石槽の設置年代と想定されている。

古代における亀の造形を総覧しての考察、飛鳥時代の庭園施設とその性格の分析、酒船石遺跡との比較、『四天王寺縁起』に始まる中近世の文献での所見の蒐集、『聖徳太子絵伝』や「浪速名所図」・祭礼図、伽藍図など絵画資料の網羅的な提示といった各専門的見地からの分担執筆により、国家的な湧水祭祀遺構としての成立から、太子信仰・浄土信仰に関わる浄水・聖水や名所としての歴史が通して把握されている。

一般の歴史ファンの関心も惹くような調査成果で、分担者間での意見の並立は視野を広める役割を果たし、一般書籍化も期待される。（藤原重雄）

林寺正俊「日本古写経の系統分析―中阿含経―を例として―」（『古写経研究の最前線―シンポジウム講演資料集―』国際仏教学大学院大学学術フロンティア実行委員会、二〇一〇年）

丸善雄松堂による聖語藏経巻カラーデジタル版の刊行により、東大寺に伝わった聖語藏経巻を簡単に見ることができるようになった。そのなかでも「天平十二年（七四〇）御願経（五月一日経）」と「神護景雲二年（七六八）御願経」は奈良時代の代表的な写経事業であり、さらに「神護景雲二年御願経」は大半が宝亀年間に書写された今更一部で、その他に先一部・始二部・更一部、そして神護景雲経が含まれていることがあきらかにされている。現在、同一経典があれば、これらの本文テキストとの比較が可能となっている。

本論文は我々の一歩先を行く論文であり、参照すべき点が多々ある。三九七年十一月から約半年をかけて僧伽提婆が翻訳した『中阿含経』を、五月一日経・七寺本（平安末期写）・金剛寺本（鎌倉中期写）のみならず、敦煌本（六〇二年写）・高麗初雕本（一〇一〇一〜一〇一七七年）・金藏広勝寺本（一一四九〜七八年）・房山石経（一一五三〜五五年）・磧砂本（一一一六〜七二年頃）・高麗再雕本（一二三六〜五一年）など、広く中国・朝鮮半島の諸本とも比較している。この膨大な本文テキストを比較する際に、著者はまず經典の各末尾・各巻末・各品末尾に文字数を記載するタイプと記載しないタイプに分け、次に『大正蔵』（『大正新脩大藏経』）の脚注に注目し、諸本との異読箇所を調査する。その結果、金剛寺本の巻四八は七寺本と同じ系統で房山石経に近いこと、巻八は敦煌本と房山石経に近いことから、金剛寺本は長安で行われていた写本の系統に連なるとする。誤字・脱字の多い古写経の取り扱いが今後の課題であるが、『大正蔵』の脚注を活用し、その異読部分を重点的に調査する方法は効果的かつ効率的である。

奈良時代の古写経については、これから本格的に本文テキストを比較し、その底本や写本の系統をあきらかにしていかなければならない。本論文が示したように、いずれは中国・朝鮮半島を含めた仏教經典の伝播のなかで、奈良写経を捉え直すことができるようになればと思う。（市川理恵）

福原敏男「傘に吊るす御守―子どもの魔除け―」(坂本要編『東国の祇園祭礼 茨城県霞ヶ浦周辺地域を中心に』岩田書院、二〇一九年二月)

斉藤研一「子どもの御守り」(『子どもの中世史』吉川弘文館、二〇〇三年。初出一九九七年)は、中世から近世初頭の絵画史料を中心に、懸守・筒守・背守の三種を民俗事例をも参照して分類するが、本論文は、近世の祭礼図や現行の行事そのものを大きく取り込んで、子どもに差しかけられた傘に吊るす御守の意匠や性格を整理している。

中心となるのは、祭礼や参詣というハレの外出に、身につけない筒守を子どもの近くに掲げて周囲に見せつつ携行する事例である。傘下の子どもの頭部近くに御守を吊るす他、駕籠・輿の前方や内部に吊している。親らによる外出時の魔除け祈願であり、傘の下という空間を守護するものであった。

祭礼行列の傘鋒には、子どもの神役を標示する意味を備えた事例や、子どもがいけない場合もある。筒守と形態に近い巻物(の模造)を吊るす他、基本的には大人が身につける懸守であったり、裂などで装飾されることもある。ミニチュアの傘に縁起物を吊るし、寺社に奉納して天井より吊るす傘鋒・傘福もある。祇園祭の稚児については、歴史的経緯が詳しく記される。また、祭礼を見物する側の子どもに差しかけられた事例も収集される。長崎の幼児の宮参りで傘に吊るされた袋物は、命名の風俗に関するものと推定している。これらは、信仰と装飾との峻別がさして意味をなさない社会で広く営まれていた習俗であった。豊富な事例は掲載図版のみで網羅できないが、Webサイトで確認できる事例も増えており、その注記が付けられている。

なお末尾に中世の文献上の所見として『経覚私要抄』宝徳二年(一四五〇)七月十六日条の風流の趣向「笠ノ下ニ龍守」を紹介するが(『史料纂集』二冊一四〇頁)、自筆原本の「龍」は欠損して読みにくく、史料編纂所蔵の筆耕本も「龍」とするが、残画と意味から「懸」で良からう(国立公文書館蔵『要記』古一九一三五九イ一四・同館デジタル画像12コマ目)。

(藤原重雄)

奈良国立博物館編『正倉院宝物に学ぶ3』(思文閣出版、二〇一九年一〇月)

同館で毎年秋に開催される正倉院展にあわせ、二〇〇五年からは「正倉院学術シンポジウム」が続けられているが、本巻ではその第七〜九回(二〇一一年〜一三年)の内容をまとめてみる。第七回は「正倉院宝物のはじまりと国家珍宝帳」、第九回は「鑑真和上と正倉院宝物」と題して開催されているが、ここでは第八回「壬申検査と正倉院の近代」について紹介していきたい。

高橋隆博「明治初期の文化財保護と正倉院」は、廃仏毀釈による文化財の破壊や散逸への憂慮から実現した明治五年の社寺宝物調査(壬申検査)の画期性を論じ、これが昭和二五年の文化財保護法の基礎になると指摘する。西川明彦「明治時代の正倉院宝物」は、正倉院事務所で宝物の調査研究に携わる立場から、壬申検査とその後の宝物修理について、また宝物調査の先輩である蜷川式胤と稲生真履の事績や人柄について論じる。恵美千鶴子「東京国立博物館所蔵の蜷川式胤関係資料」は、創設期の博物館の中核的役割を果たした蜷川式胤について、寄贈した模本・拓本類から彼の文化財に対する研究的な姿勢を読みとる。原瑛莉子「東京美術学校収集・製作の正倉院宝物模本について」は、藝大所蔵の正倉院宝物模本六五件について分析を加え、その製作契機を美術教育や文化財保護の視点から読み解いていく。

論旨を雑駁にまとめると以上だが、本領はいずれも具体的な事例分析であり、蜷川式胤が宝物を掠め取ったとする噂に対する明快な弁護など、興味深い話題が満載である。個人的には紹介子の作成した図録『森川杜園『正倉院御物写』の世界』(二〇〇九年)の活用や批判もあり、多くの示唆を受けた。

シンポジウムの一聴衆であった立場からは、会場スクリーンに示された画像を演者が詳しく解説していくところに興奮を覚えたが(特に西川報告における明治時代の宝物状況と現状の解説など)、書籍ではその面白みが上手く伝わってこないのが残念に思った。図版はカラーも含めて数多く提示されているのだが、やはり口頭による説明には及ばない。シンポジウムは現在も毎年秋に開催されており、ぜひとも聴講をお勧めしたい。

(稲田奈津子)